横顔 就任インタビュー

患者、スタッフにも選ばれる病院に

全国的にも人気の高い嬉野温泉のある佐賀県嬉野市。「樋口病院」は、医院時代を含めこの地で長く地域住民の健康を支えてきた。新理事長の樋口正晃氏は、県内初の治療法を導入するなど新たな取り組みを始動させた。

医療法人陽明会 樋口病院
樋口（ひぐち） 正晃（まさあき） 理事長
2002年東邦大学医学部卒業。福岡大学医学部脳神経内科助教、米フロリダ大学留学、医療法人陽明会樋口病院副院長などを経て、2023年から現職。

医療法人陽明会 樋口病院
佐賀県嬉野市塩田町馬場下甲1 ☎0954-66-2022（代表）
https://higuchi-hospital.com/

パーキンソン病の新たな治療法導入

福岡大学で研さんを積み、脳神経内科医としてパーキンソン病を専門としてきた樋口氏。２０１７年に曽祖父の代から続く樋口病院（80床）の副院長となり、23年４月、４代目の理事長に就いた。

副院長時代には、脳神経内科を新設し、自らが診療を行っている。加齢につれて増加する脳神経内科の対象疾患の診療を担う専門医が不足しており、県内、県外各地から患者が訪れている。

さらに理事長に就任してからは、パーキンソン病に対するデバイス治療法の一つである「ヴィアレブ配合持続皮下注」を県内で初めて導入した。同じデバイス治療法には脳深部刺激療法もあるが、外科手術が必要で、治療に踏み切れない患者も多くいるという。新たに導入した治療法は手術が不要で、体への負担も少ない。進行期に日常生活への支障を抑える治療法の選択肢が増えた形だ。

樋口氏は、「一度きりの人生。『田舎にいるから』『高齢だから』と諦めてほしくない。少しでもお役に立てればとの思いで、導入しました」と語る。

働きがいや組織力高めるために

理事長就任時、「働きがいのある職場」「組織力の向上」「患者さんからもスタッフからも選ばれる病院」を目指すことを抱負とした。

働きがいや組織力の向上への第一歩として、若手のメディカルスタッフを募り、「カイゼン委員会」を発足させた。「自分たちの病院が、どうしたらより良い方向に進めるか。現状に満足することなく、そしてトップダウンではなく自ら考え、行動に移せるようになってほしい。一人一人がこうしたマインドを持つことで、組織としての力を高めたいと考えています」。パーキンソン病の新たな治療法は、この委員会が中心となって導入に至った。これを成功体験に、多職種で自発的な動きが広がるのを期待する。

樋口氏は約10年前に米国のフロリダ大学へ留学し、パーキンソン病の世界的権威に師事。最先端の治療法を学ぶと同時に、多職種が一丸となりチーム医療が実践されている現場を目の当たりにした。「良い結果を生み出すために、医師と共にさまざまな職種のスタッフがプロフェッショナルとして治療に臨んでいました」。この風土を自院に取り入れることも、組織力の向上につながると見据える。

「キャプテン」としてチームを束ねる

学生時代はラグビーに打ち込み、チームワークと小さな一歩であっても前進することの大切さを身をもって知った。その経験を、病院運営にも生かしていく。「スタッフはもう聞き飽きているかもしれませんが、『Ｏｎｅ ｆｏｒ Ａｌｌ Ａｌｌ ｆｏｒ Ｏｎｅ』の精神を大事にしようと日頃から伝えています」。一丸となり同じ方向性で前進することで、働きがいや組織力が高まる。それが実現できれば患者の信頼を得られ、新たな人材も集う「選ばれる病院」になると思い描く。

病院での自身の役割をラグビーのチームで例えると、「キャプテン」だと言う。「理事長は、『監督』の方がしっくりくるかもしれません。しかし私は、現場の医師としてもまだまだやらなければいけないことがある。現場に立つ以上、自分もプレーしながらチームをまとめる『キャプテン』でありたいと思っています」。コミュニケーションを大事にしながらリーダーシップを発揮し、選ばれる病院を目指す。